杜甫詩の真偽
―「虢国夫人」札記―

後藤秋正

はじめに

杜甫の作と称されてきた詩の中には、真偽の定かでない詩が含まれており、他詩人の詩が混入している可能性もある。このことについて例えば『杜詩詳注』（以下、『詳注』）巻二十三、「少陵逸詩小序」は、「杜詩は人間に零落し、宋の時　後先に継いで出づ。諸家の採る所は、贋本頗る多し。附余の四十五章は、蔡氏　諸（これ）を正集に登し、疑いを伝えて未だ決せざる者に至っては、亦名姓　両つながら存す、張祜・杜誦・暢当の如きは、『文苑英華弁證』に得たり。」と指摘している。「附余の四十五章」とは蔡夢弼『草堂詩箋』巻四十、「逸詩拾遺」に収める「瞿塘懐古」1037から「絶句三首」0815~0817に至るまでの四十五篇を指す（詩題に付した四桁の数字は『杜甫全詩訳注』（講談社学術文庫、二〇一六）の作品番号）。本稿で取り上げる七絶「虢国夫人」0079は、張祜（七九二～八五四）[1]の「集霊台二首」〈其二〉（『全唐詩』巻五一一）であることがほぼ解明されている一篇である。

虢国夫人承主恩　虢国夫人　主恩を承け
平明上馬入宮門　平明　馬に上り宮門より入る
却嫌脂粉涴顔色　却って脂粉の顔色を涴（けが）すを嫌（いと）い
淡掃蛾眉朝至尊　淡く蛾眉を掃（は）きて至尊に朝す

従って作者についての疑義は主要な問題とはならないかもしれないが、これまでの議論を再検討する中で、いくつかの事柄を付け加えることができるであろう。

一

この詩が杜甫の詩として早くに見えるのは『草堂詩箋』巻四十である。『宋本杜工部集（続古逸叢書）』、王洙『杜工部集』、『九家集注杜詩』などはこれを収録しない。『草

堂詩箋』「逸詩拾遺」はこの詩から「哭台州鄭司戸蘇少監」0795までの詩を収録して、「右二十七篇は、朝奉大夫員安宇[2]の収むる所」と記すのみで出処を示さないが、『銭注杜詩』巻十八、「附録」に指摘があるように、唐・楽史『楊貴妃外伝（楊太真外伝）』に基づいたものであろう。『銭注杜詩』は「他集互見四首」として「哭張孫侍御」0176などとともにこの詩を収め、「『張祐集』に見ゆ。「集霊台二首」に作る。『万首唐人絶句』は、又張祐に作る。」と言う。楽史『楊太真外伝』巻上には以下のようにある。

……姊三人有り。皆な豊碩にして修整、謔浪に工みにして、巧みに旨趣を会す。宮中に入る毎に、晷を移して方めて出づ。……〔天宝〕七載、……大姨を封じて韓国夫人と為し、三姨を虢国夫人と為し、八姨を秦国夫人と為し、同日に拝命す。皆な月に銭十万を給し、脂粉の資と為す。然るに虢国は粧粉を施さず。自ら美艶を衒い、常に素面にして天に朝す。当時杜甫に詩有りて云う、……と。又虢国に照夜璣を賜い、秦国に七葉冠、国忠に鏁子帳。蓋し希代の珍にして、其の恩寵は此の如し。

『銭注杜詩』は一方では張祜（張祐は誤り）の作ともされることを指摘しながら『楊太真外伝』を引くのである。

二

それではこの詩はいつごろから張祜の作であると指摘されてきたのであろうか。最も早く杜甫の作であることに疑義を呈したのは宋・楼鑰『攻媿集』巻七十二、「跋虢国夫人暁妝図」であろう。

「虢国夫人　主恩を承け、平明　馬に騎り金門より入る、……」。余毎に此れ恐らくは杜少陵の語に非ざるを疑い、乃ち張祜の集中に得たり。蓋し「集霊台第二篇」なり。素より同年の林子長の家に「虢国夜游図」有るを聞く、甚だ佳きも未だ之を見ず。

ここに引かれた詩と「虢国夜游図」との関連が明確ではないが、林子長の家に「虢国夜游図」があることを聞いた楼鑰は、夜明けに虢国夫人が馬に乗るのは不自然なので、「夜游図」ではなく「暁妝図」であり、杜甫がそうした詩を残すことはあり得ないと考えたのであろう。虢国夫人を画題とした絵画は好んで描かれたらしい。『宣和画譜』巻五には、「虢国夫人夜遊図」のほか、「虢国夫人遊春図」、「虢国夫人踏青図」が見え、明・汪砢玉『珊瑚網』巻二十五には、「虢国夫人行遊図」が見えている。詩では例えば蘇軾には「虢国夫人夜遊図詩」（『蘇軾詩集』巻二七）が、

李綱には「次韻虢国夫人夜遊図」（『梁谿集』巻一一）がある。

楼鑰以後もこの詩が張祜の作であると指摘する論者は多い。劉克荘『後村詩話』巻十二、張祜の条には、後に引く「邠州小管」（『全唐詩』巻五一一）とこの詩を引いて、「今祜の詩の存する者は僅かに四巻のみ、然らば則ち散落すること多し。」とある。明代に入ると、高棅『唐詩品彙』「七言絶句」巻七は張祐（張祜）の「集霊台」として収め、「又杜集に見え、虢国夫人と作す。」と注記している。

胡震亨『唐音癸籤』巻三十二は、「坡公は李・杜の二集を論じ、杜集は李集に較べて偽撰少なしと為すと謂う。此れ殆ど然らず。……絶句「虢国夫人」は、『張祜集』「霊台」の第二篇なり。此れを推すに、他集の誤入する者は自ずから復た少なからざるを知る。」と述べる。この指摘も的確である。胡応麟『詩藪』内編、巻五も、「李集には贋なる者多く、杜詩は贋なる者極めて少なし。……「虢国夫人」の一首は殊に遠し。張祜たること疑い無し。」と言う。

清代に入ると朱鶴齢『杜工部詩集輯注』が「杜工部集外詩」に収めて『楊妃外伝』を引き、「此の詩は『張祜集』は「集霊台二首」に作る、『万首唐人絶句』は張祐に作り、『三体詩』・『唐詩品彙』は幷びに張祜に作る。」と指摘する。王士禎『帯経堂詩話（漁洋詩話）』巻十八はこの詩が「杜集」に雑入したことを、「「邨歌　耳に聒（かまびす）し烏塩角、社酒情を柔らぐ玉練槌。」宋末『月泉吟社』中の佳句なり。『山居雑志』に杭の人　徐炬の『酒賦』を載せ、乃ち引きて少陵の詩と作す。格調の類否を弁ぜずして、妄りに子美と称す。則ち「虢国夫人」・「杜鵑行」・「狂歌行」諸篇は、妄人　皆な杜集に雑入す、又何ぞ怪しきか。」と述べている。(3)明・徐炬『酒賦』が「邨歌聒耳烏塩角、……」の句を杜甫の作と誤認しているのと同様に「虢国夫人」も杜甫の作と誤解されたと言うのである。このほか、『杜詩鏡銓』巻二十、「他集互見」も「『草堂逸詩』に見え、亦『張祜集』に見ゆ。」と指摘した上で、頭注に、「詩は自ずから佳し、然るに杜の作に非ず。」と、杜甫の作であることを否定する。また『読杜心解』巻六之下も「集外詩」として朱注を引き、「詩は浅露なるに似て、少陵の語に類（に）ず。」と述べている。

三

「虢国夫人」についての具体的な分析は施鴻保『読杜詩説』巻二に始まるであろう。『読杜詩説』は『詳注』の見解に批判を加えるので、先に『詳注』を確認しておこう。

詩に云う、「恩を承けて入朝す」と、乃ち虢国　寵

を得し時の作なり。類に依りて編入し、当に「麗人行」の後に附すべし、但だ未だ何れの年なるかを定めざるのみ。朱注に、此の詩は草堂逸詩に見ゆ。『張祜集』に拠れば、「集霊台」二首に作る。又、『万首唐人絶句』は張祜に作る。『三体詩』・『唐詩品彙』も張祜に作る。集霊台と紫微殿とは相い近しと。今按ずるに、祜は乃ち中唐の人、天宝を去ること已に久しく、若し虢国を追憶するの詞と作せば、亦当に微かに乱後の事を帯ぶべきに、詩意は全く之に及ばず、還って是れ現在を譏諷す、応に少陵の作に属すべきなり。

『詳注』はこの詩が安史の乱に言及しないこと、つまりそれ以前に書かれたものであって、その当時のことを婉曲に譏った詩なので、杜甫の詩であると判断したと言うのである。この見解に対して『読杜詩説』は反論を加える。

虢国夫人の題注に、朱説を引く、「……」と。又注に云う、「此の詩の諷刺は微婉なり、「虢国」と曰うは、封号を濫りにするなり。「恩を承く」と曰うは、女謁を寵するなり。「平明　馬に上る」と曰うは、人の見るを避けざるなり。「淡く蛾眉を掃く」と曰うは、妖姿　媚びを取るなり。「門に入りて尊きに朝す」と曰うは、出入に度無きなり。当時　宮闈を濁乱すること此の如く、已に陳倉の禍を兆す。一旦　紅顔　地に委つれば、白骨　誰か憐れまん、徒だ臭を千年に貽すに足るのみ」と。今按ずるに此の詩は固より当に此の如く解すべし。若し僅かに虢国入宮図を写すのみならば、絶えて寓意無し、独り公の詩に之れ無きのみならず、即ち張祜も亦必ず為さず。

惟れ公の時に在っては、三国の寵幸は方に盛んに、即ち其の後　必ず終わらざるを灼知するも、陳倉の禍は則ち料る所に非ざるなり。若し是れ張祜の作ならば、則ち詞は其の現在を説くと雖も、而るに意は則ち其の後来を寓し、読者をして自ずから言外に会せしめんとす。且つ公の集の七絶は多く此の詩と類ず、必ず『草堂逸詩』の誤りて収むる者なり。題注に又云う、「祜は是れ中唐の人、天宝を去ること已に久し、若し追憶の詞を作せば、亦当に微しく乱後の事を帯ぶべし、詩は全く及ばず、還って是れ現在を譏諷すれば、応に仍りて少陵に属すべきを是と為す」と。此の説は但だに真贋　弁ずる莫きのみならず、且つ全く此の詩の語の妙なるを識らず。

「注」と「題注」はいずれも『詳注』を指す。陳倉の禍とは、天宝十五載（七五六。七月、至徳と改元）六月、楊

貴妃が馬嵬坡で縊殺された後、陳倉県（陝西省宝鶏市）へ逃げた虢国夫人が、県令薛景仙のもとで死んだことを指す。『旧唐書』巻五十一、楊貴妃伝は彼女の最期を、「馬嵬の国忠を誅するや、虢国夫人　難の作（おこ）るを聞き、馬を奔らせて陳倉に至る。県令薛景仙　人吏を率いて之を追うに、走りて竹林に入る。……已にして自刎するも、死せず、県吏之を載せ、獄中に閉づ。……血凝り喉に至りて卒し、遂に郭外に瘞（うず）む。」と記す。『読杜詩説』は『詳注』が寓意を含んだ詩であるとしたことは認めた上で、もし張祜の作ならば安史の乱（陳倉の禍）に言及するはずであるのにそれがないので杜甫の作と認めたことに対して、真贋を弁別せず、表現の巧みさに無理解であると退けるのである。『読杜詩説』はこの詩は虢国夫人の得意の絶頂期を描写してその後に起こったことを暗示する点に妙味があり、杜甫の他の七絶とは異なることを贋作である証左としたのである。

四

ここで曹樹銘『杜臆増校』（台北商務印書館、一九七一）の見解に触れておこう。

『杜臆』巻九はこの詩について、「此れ天宝の間の詩、誤りて此に賃（お）く。脂粉は顔色の為にして設くるに、反って脂粉の顔色を涴すを嫌う。其の言は味有り、其の理は推す可し。世間に脂粉を以て顔色の為にする者多し。」と述べるのみだが、『杜臆増校』は、この詩に関する見解を自身のそれを含めて以下のように五項目に分けて紹介し、杜甫の作と断定する。

一、作譏諷論、係杜詩。二、作譏諷論、係張祜詩。三、作互見詩、全不作論断。四、作直詠及浅露論、無諷意、係張祜詩。五、本人之意見、略同仇注、作譏諷論、係杜詩。

「一」の「譏諷」を含んだ杜甫の詩と認めるものでは『詳注』、『九家集注杜詩』と『杜臆』が挙げられ、「二」の「譏諷」を含んだ張祜の詩と認めるものでは『読杜詩説』が、「三」のどちらの作とも論断しないものとしては『銭注杜詩』と楊本（『杜詩鏡銓』）が挙げられている。ただし『杜詩鏡銓』の頭注は先述したとおり、杜甫の詩ではないと指摘していて「論断」していないというのは誤りである。「四」の事実を詠じて深みに欠け、風刺は含まれず、張祜の作であるとするものでは「日本明治詩人」として「森大来（槐南）」の「評釈」（『杜詩講義』中巻、文会堂書店、一九一二）が取り上げられ、彼の沈徳潜を引用した見解は杜甫の「現実主義精神」を地に委ねるものだと批判する。

沈徳潜、号は帰愚の『唐詩偶評』巻四は「神傷を言わず、聚散古今の感、皆な中に寓す。此れ断句の正声にして、杜の集中に偶〻見ゆる者なり。○凄婉は、全て一の又の字に在り。」と指摘している。『杜詩講義』の中で、沈徳潜『唐詩偶評』に触れている部分は次の通りである。ただしこれは「江南逢李亀年」1440についての発言である。

此処の評にも不言神傷聚散古今感皆寓於中、此断句正声、杜集中偶見者也とありますが、所謂聚散古今の感をば皆不言の中に寓してあります、即ち彼二十四品の中に不著一字、尽得風流と申す処であります、詩の妙境は其処に在るのであります。……(4)

『杜臆増校』は『杜詩講義』が沈徳潜の説のように、この詩に譏諷のあることを指摘せず、温柔敦厚な側面を強調する点に、「癥結」、つまりわだかまりがあると見なしたのである。なお沈徳潜『唐詩別裁集』巻二十には張祜「雨霖鈴」を収め、「集霊台」にも言及して、

祜に又集霊台の詩有り、「却って脂粉の顔色を汚すを嫌い、淡く蛾眉を掃きて至尊に朝す」と。譏刺は軽薄にして、絶えて詩品無し。後人　杜集に雑入し、衆口　交〻賛うるは、真に不可解なり。

と述べる。沈徳潜はこの詩が張祜の「集霊台」であることを認め、譏刺を含むものの軽薄であり、風格がないと言うのである。『杜臆増校』はこの詩に譏諷が含まれていることを前提として、これを指摘しない森槐南の説を退けている。「五」で『杜臆増校』は自説を述べる。そこでも前提となるのは『読杜詩説』の指摘の通り、「譏諷」を含むと見なすことである。その上で「麗人行」0078、「北征」0188、「冬狩行」0692などを引き合いに出し、「公詩可以刺楊妃、何独不可以刺虢国。」と述べ、楊貴妃だけを譏って虢国夫人を譏らないことはあり得ないことを強調し、最後に再び森槐南の説に言及してこれを否定し、「郭本注」と「王説」が正しく、杜甫の詩であることは確かであると結論づけている。「郭本」は『九家集注杜詩』を、「王説」は『杜臆』を指すが、『杜臆増校』が用いた『九家集注杜詩』（『増校本杜臆説明』に「本書所拠『九家集注杜詩』、唐杜甫著、宋郭知達編注、一九三〇年燕京大学引得特刊第十四号杜詩引得本、第二冊。」とある）の「杜詩補遺」の部分は『詳注』をほぼそのまま収録したものであり、郭知達がこの詩を杜甫の詩と認めて収載したわけではない。この点は「一」の見解とも関わって、その指摘に疑問を呈さざるを得ない。なお森槐南の言として「「張祜詩無譏刺」一節」とあるが、『杜詩講義』には張祜に言及した部分は

見当たらない。『杜詩講義』が沈徳潜『杜詩偶評』によっていることは、『杜詩講義　上巻』「例言」に述べられている。

五

その後の論考について、管見に入ったものを発表年の順に取り上げてみよう。呉鷺山「杜詩的真偽」（『杜詩論叢』浙江文芸出版社、一九八三）は以下のような点を挙げて張祜の詩であると認める。『楊妃外伝』は稗官小説であって、信用が置けないこと、張祜「集霊台二首」は〈其一〉が楊貴妃を詠じ、〈其二〉は虢国夫人を詠じ、構成が完全であって分割できないこと、中唐の、劉禹錫「阿嬌怨」、王建「宮詞」、徐凝「宮中曲」などの詩と風格が類似していること、『万首唐人絶句』、『唐詩品彙』が張祜の詩としているのは信用できることなどである。「杜詩的真偽」は最後に『詳注』に触れて、以下のように指摘する。

仇兆鰲が杜甫の詩と断定したのは、中唐詩人の宮詞が、この詩の作り方に類似していることを知らなかったのである。例えば張祜の「邠王小管」（『全唐詩』巻五一一）は、

虢国潜行韓国随　虢国は潜行して韓国は随い
宜春深院映花枝　宜春の深院　花枝に映ず
金輿遠幸無人見　金輿　遠く幸して人の見る無く
偸把邠王小管吹　偸（ひそ）かに邠王の小管を把りて吹く

と、虢国夫人と韓国夫人を「追詠」しているが、安史の乱後の事には言及しない。また「集霊台二首」〈其一〉も、

日光斜照集霊台　日光　斜めに照らす集霊台
紅樹花迎暁露開　紅樹　花は暁露を迎えて開く
昨夜上皇新授籙　昨夜　上皇　新たに籙を授け
太真含笑入簾来　太真　含笑して簾に入りて来る

と、楊貴妃を「追詠」するが、これも乱後の事には言及しない。従って仇兆鰲の論断には根拠がない。唐人の詩は一詩、あるいは数詩が他詩人の集に見えることがあり、弁別は困難だが、「虢国夫人」はそうした一類に属している。

また、李汝倫「『虢国夫人』非杜詩弁」（『杜詩論稿』広東人民出版社、一九八三）は、まず、多くの論者が張祜の作ではないかと疑問を呈した中で、『詳注』がこの詩を杜甫の詩であると認めたことは大きな影響を与えた。(5) しかし『詳注』の論拠は不充分であり、もともと詩人が前事を追憶し、いにしえを詠じ、歴史を詠ずる時には当時の事柄を詠じてその後のことには言及しないものであり、張祜の二首はこの枠内で詠じられている。もし『詳注』の論法が成り立てば、この類の詩の著作権がすべて問題となるのであ

って、『詳注』の論法は「荒謬」である、と指摘する。ついで諷刺がこめられているという『詳注』の見解は肯定した上で、『読杜心解』が「浅露」であるとしたことを否定する。さらに『読杜心解』の「少陵の語に類ず」という発言は実情に近いと認め、「同類の題材」に属する「麗人行」と比較し、「麗人行」は大きい視点から詠じ、「虢国夫人」は小さい視点から詠じたものであることを指摘し、「麗人行」のような多角度からの描写は張祜には不可能であって、「虢国夫人」のような絶句はその名手である張祜の作であると見なす。ここで李汝倫が張祜の絶句として挙げるのは、「邠王小管」、「馬嵬坡」、「太真香囊子」（以上、『全唐詩』巻五一一）であり、「流暢にして清麗」であるとする。これらの絶句と「集霊台二首」とは「筆法」が類似していると言うのである。こうして李汝倫は、「虢国夫人」は完全に杜甫の作ではなく張祜の作であると結論している。(6)

呉企明『唐音質疑録』（上海古籍出版社、一九八五）「杜甫詩弁偽札記」は『詩藪』などを挙げて張祜の作であることを明らかにしている。(7) 中でも杜甫は張祜とは違い、天宝の時事を詠ずる際には絶句ではなく、新題楽府か古体詩を用いるという指摘も的確である。その中で張祜と同時代人の発言として皮日休「論白居易薦徐凝屈張祜」（『全唐文』巻七九七）を取り上げていることは注意してよいだろう。

祜は元和中　宮体詩を作り、詞曲　艶発し、当時軽薄の流は其の才を重んじ、合噪して誉れを得たり。

諸書に指摘があるように張祜には宮体詩が多い。張祜が王建の影響を受け、「宮詞」を得意として「声誉」を得ていたことは呉企明も指摘していた。このほか杜甫の作であることを否定する見解を述べるものには佟培基『全唐詩重出誤収考』（陝西人民出版社、一九九六）がある。佟培基は張祜の作であると断定はしないが、挙例の仕方から見て、張祜の作と判断していることは間違いない。なお佟培基の、「郭氏『九家集注杜工部詩』補二倶収。」という指摘は、誤解を招こう。『九家集注杜工部詩』はこの詩を載せず、『杜詩引得』の「補遺」は先述のように、『詳注』を転載したものだからである。

六

我が国ではこの詩の真偽に言及されることが少ない。その中で鈴木虎雄『杜少陵詩集』（国民文庫刊行会、一九二八）の「題義」は、「此の詩或は張祜の作とせらる、祜は中唐の人なり、唐の楽史の『楊太真外伝』には杜甫の詩と

して引けり。果して杜甫の作なるや否も知りがたし。作時も明かならず。」と述べ、『楊太真外伝』には言及するものの、これ以上の考察はない。吉川幸次郎『杜甫詩注』第一冊（筑摩書房、一九七七）は「虢国夫人」を収録せず、「麗人行」の「余談の一」で「中唐の張祜の作であり、杜の真作でないと、判定されている。」と述べている。

また『杜甫全詩訳注（一）』（「虢国夫人」の担当は詹満江）は、『詳注』を底本としているが、「この詩は、一説に「集霊台」と題し、張祜（七九二?～八五二）の作とする（『万首唐人絶句』、『三体詩』）。」と指摘している。

七

最後に張祜の宮体詩を何篇か見ておこう。先に皮日休の発言を引いておいたが、陸游『容斎続筆』巻二、「唐詩無諱避」も張祜の作と認め、具体的な作品名を挙げて次のように指摘する。

唐人の歌詩は、其の先世及び当時の事に於けるや、辞を直にして詠寄し、略避隠する無し。宮禁　嬖昵に至っては、外間の応に知るべき所の者に非ざるに、皆な反復極言して、上の人も亦以て罪と為さず。……張祜は「連昌宮」・「元日杖」・「千秋楽」・「熱戯楽」・……・「華清宮」・「集霊台」・……・「散花楼」・雨霖鈴」等三十篇を賦し、大抵　開元・天宝の間の事を詠ず。……今の詩人は敢えて爾せざるなり。

また許学夷『詩源弁体』巻二十九も、「張祜は、元和中に宮体七言絶三十余首を作り、多く天宝の宮中の事を道い、録に入りし者は王建の工麗なるに較べて稍遜るも寛裕なるは之に勝る。其の外の数篇は、声調　亦高し。」と言う。いずれも張祜の宮体詩を高く評価しているが、諷刺性に着目しているわけではない。

翁方綱『石洲詩話』巻二が、「張祜の絶句は、毎に鮮葩　颯灑し、焰水　泊浮するが如く、特だに「故国三千里」一章の小杜に称せらるるのみならざるなり。」と彼の絶句を称賛し、沈徳潜『説詩晬語』巻上にも、「五言絶句、……。他の崔顥「長干曲」・王建「新嫁娘」・張祜「宮詞」等の篇の如きは、専家に非ずと雖も、亦絶調と称す。」という評価が見える、「宮詞二首」（以下、いずれも『全唐詩』巻五一一）をまず引こう。

故国三千里　故国　三千里
深宮二十年　深宮　二十年
一声河満子　一声の河満子
双涙落君前　双涙　君前に落つ　〈其一〉

自倚能歌日　自ら倚りて歌を能くする日
先皇掌上憐　先皇　掌上に憐れむ
新声何処歌　新声　何処にか歌う
腸断李延年　腸は断ゆ李延年　〈其二〉

「河満子（何満子）」は楽曲の名。「宮詞二首」は漢代に題材を取ったものだが、次に楊貴妃を詠ずる詩を見よう。

「連昌宮」
竜虎旌旗雨露飄　竜虎の旌旗　雨露に飄り
玉楼歌断碧山遥　玉楼　歌断えて碧山遥かなり
玄宗上馬太真去　玄宗は馬に上り太真は去る
紅樹満園香自銷　紅樹　園に満ちて香り自ずから銷ゆ

連昌宮は河南省宜陽県にあった離宮。高宗の顕慶三年（六五八）に置かれた。紅樹は碧桃樹。元稹「連昌宮詞」（『全唐詩』巻四一九）に、「又牆頭　千葉桃有り、風動き花を落として紅蘇蘇たり」と詠じられる。

「寧哥来」
日映宮城露半開　日は宮城に映じて露半ば開く
太真簾下畏人猜　太真は簾下に人の猜（そね）むを畏る
黄翻綽指向西樹　黄翻綽は指さして西樹に向かい
不信寧哥回馬来　信ぜず寧哥の馬を回らして来るを

宋蜀本『張承吉文集』を底本とし、明刻本『張処士集』などを用いて校定したという尹占華『張祜詩集校注』（甘粛文化出版社、一九九七）によると寧哥は邠王李守礼の子、李承寧。黄翻綽（黄幡綽）は玄宗の時の伶人。一篇は楊貴妃と李承寧が曖昧な関係にあったことを詠ずるとする。

「馬嵬坡」
旌旗不整奈君何　旌旗　整わず君を奈何せん
南去人稀北去多　南去の人は稀にして北去は多し
塵土已残香粉艶　塵土　已に香粉の艶を残（そこ）なうに
荔枝猶到馬嵬坡　荔枝　猶お到る馬嵬坡

承句は、皇太子であった粛宗が北へ向かい、玄宗が成都へ向かったことを言う。

「太真香囊子」
蹙金妃子小花囊　蹙金　妃子の小花囊
銷耗胸前結旧香　銷耗す胸前　旧香を結びしを
誰為君王重解得　誰か君王の為に重ねて解き得ん
一生遺恨繫心腸　一生の遺恨　心腸を繫ぐ

この詩は玄宗が蜀地から長安に戻る際、馬嵬坡に仮埋葬してあった楊貴妃を改葬しようとして、その墓を開かせると彼女が身につけていた香嚢が残っていたという故事（『新唐書』巻七六、「楊貴妃伝」）に基づく。

「馬嵬帰」

雲愁鳥恨駅坡前　雲は愁え鳥は恨む駅坡の前
孑孑竜旗指望賢　孑孑たる竜旗　望賢を指す
無復一生重語事　復た一生　重ねて語る事無し
柘黄衫袖掩潸然　柘黄　衫袖　掩いて潸然たり

孑孑は、ぽつんと立つさま。望賢は咸陽にあった望賢宮。至徳二載（七五七）十二月、上皇が蜀地から戻る時に、粛宗はここで出迎えた（『旧唐書』巻一〇、「粛宗本紀」）。転・結句は、天宝十載（七五一）七夕の夜に、玄宗と楊貴妃が驪山宮で将来を誓い合ったという故事（陳鴻『長恨歌伝』）に基づいている。

「集霊台二首（虢国夫人）」をこれら一群の詩のうちに配置しても、不自然さは全くない。『杜詩論稿』が、論理的にも描写も張祜の一連の詩と共通していると具体的に指摘していることは、十分な説得力を持っている。(8)

八

先述したように『詳注』はこの詩には一句ごとに婉曲な諷刺がこめられていると見なし、李汝倫もこの点については同意していた。しかし果たしてこの詩からは『詳注』が指摘するような諷刺が読み取れるものであろうか。尹占華「論張祜及的其詩」（『張祜詩集校注』所収）はこの詩が「開元天宝」の「遺事」を詠じたものであって、許学夷『詩源弁体』巻二十九の発言を引きながら、「風俗画巻」であると述べ、さらに皮日休や陸游の見解には誤解があるとして、張祜の「華清宮四首」・「折楊柳枝二首」には玄宗と楊貴妃に対する恨み嘆く感情が満ちており、葛立方の評価は意を得ていると言っている。(9)

ただしそこに引かれる葛立方『韻語陽秋』巻十五からの引用には省略があるので全文を引こう。

阿濫堆は、唐の明皇の作る所なり。驪山に禽有り、名は阿濫堆、明皇　玉笛を御し、其の声を将（もつ）て翻りて曲と為し、左右　皆な能く伝唱す。故に張祜の詩に云う、「紅葉　蕭蕭として閣半ば開き、玉皇　曾て此の宮に幸して来る、今に至る風俗　驪山の下、村笛　猶お吹く阿濫堆。」二君（尹占華注、陳後主与唐玄宗）は驕淫　侈靡にして、歌曲に耽嗜し、以て亡乱するに至る。世代は異にすと雖も、声音は猶お存す、故に詩人は懐古し、皆な「猶お唱う」・「猶お吹く」の句有り。嗚呼、声音の人に入ること深し。

尹占華の前述の見解は傾聴に値しよう。諷喩や諷刺のみがその特質ではないのである。

我が国では小杉放庵『唐詩及唐詩人』（書物展望社、一

九四〇、和紙版）が「華清宮」や「何満子」を取り上げて、「張祜は宮体の小詩に於て無双の名あり、一詩出づる毎に人争つて之を愛吟した、どこの国でも、流行唄（はやりうた）は大抵センチメンタルなもの、宮体は内宮の艶女の、閨中の恨みや風月の感傷を題にする、頗るセンチメンタル、だから張祜の愛読者は後宮の佳麗に多い、……。」と言う。ここでも張祜の「宮体の小詩」には諷刺がこめられているとする指摘はない。率直な印象を述べたと言うべきであろう。

おわりに

張祜「集霊台（虢国夫人）」〈其二〉は、李攀竜（一五一五～一五七〇）の撰と伝えられる『唐詩選』巻七にも収録され、我が国でも読まれていた。そのことがこの詩は杜甫の作ではないと認識される基底にあり、この詩の作者に関する論考が少ないことにも影響したのであろう。この詩を杜甫の作とする論者の中でも仇兆鰲が一句ごとに諷刺を読み取ろうとした姿勢は際立っている。確かに杜甫に風刺性の強い作品群が存在することは周知に属する。そうであるからといって「虢国夫人」までもがそれら一群の詩と同様の傾向をもつとは見なせない。杜甫の詩には追懐や懐古を主とする作品群も存在するのであり、すべてが風刺性の強い作品であるとは限らない。この詩をそれら風刺性の強い作品と同列に扱ったことが、仇兆鰲の、さらには曹樹銘の判断を誤らせたのではなかろうか。

注

（1）傅璇琮『唐才子伝校箋』（中華書局、一九九〇）による。

（2）員安宇についての詳細は不明。拙稿「杜甫詩の真偽―「過洞庭湖」札記―」（『中国文化』七六、二〇一八・六）で述べたことがある。

（3）『居易録』巻七にも同様の話柄を載せるが、本文には若干の異同がある。

（4）司空図『二十四詩品』の「含蓄」の条に見える。

（5）例えば『詳注』に依拠したとする韓成武・張志民『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、一九九七）は、「詩中諷刺虢国夫人的狐媚相。」とする。

（6）原文は以下の通り。「因此、「虢国夫人」決不是杜甫的。雖然它是首好詩、但硬拔給杜甫、也不会給杜集添加什麼光采。杜集没有此詩、完全不影響詩聖的偉大。為什麼替詩聖向他的後人掠美呢？還是把「虢国夫人」完璧地還給詩人張祜吧！」

（7）原文は以下の通り。「「虢国夫人」乃是張祜詩、題名為「集霊台二首」（二）、楽史『楊太真外伝』誤把此詩記為杜甫作。……「虢国夫人」是張祜詩、還有下列古籍為証。

……小説家之言不可信、我們不能根拠唐宋人小説進行唐詩輯佚工作。

（8）原文は以下の通り。「……張祜是位写絶句的能手、他的絶句写得大都不錯、「太真含笑入簾来」也是被専家們重視的好詩。更主要的還在于他用七絶的形式写了不少関于玄宗・貴妃的詩、如「邠王小管」・「寧哥来」・「馬嵬坡」・「太真香囊子」等、都写得流暢而清麗。作為「集霊台二首」、先写貴妃、後写虢国、先有貴妃之寵、後有虢国之乱（其実貴妃的入宮也是種乱——乱倫的乱）、合乎邏輯。二詩在情調・語言上是統一的、筆法是相近的。

（9）原文は以下の通り。「其実他們都多少誤解了張祜、張祜的本意并没有背離諷諭懲勧的詩教、只不過詩意委婉含蓄、隠而不露、才使一向主張明白易諭的新楽府詩人們一時没有理解其中的真諦。倒是陸亀蒙説他「講諷怨譎、時与六義相左右」、尚為知音。張祜「華清宮四首」・「折楊柳枝二首」、便充満了対唐玄宗与楊貴妃的無限悵惋之情、葛立方曾評「……。」可謂得其意。

（北海道教育大学名誉教授）